五月二十日のＡＢＣは、めったに使うことのない波止場会館の大会議室２です。
（予約に遅れをとりました。卯年生れですからしょうがないですかねぇ）
いつもの４Ｂの奥です。お間違えのないように。
さて、テーマの方は、
《「伊勢物語」型と「源氏物語」型》
としておきます。
前回、光琳の「燕子花屏風」を眺めながら、光琳は「伊勢物語」派だという推理をしました。
光琳の制作姿勢は、「伊勢物語」の文体と親戚だということを言いたかったのですが、そのさい、「伊勢物語」型と対比したのが「源氏物語」型でした（広い意味での表出体としての文体の型の対比です）。
今回は、この問題を、『伊勢物語』と『源氏物語』のテクストを味わいながら、もう少し煮詰めたいと思います。
（以上、前口上）

去年の十二月のＡＢＣでしたか《作品が用意している三つの感興》について議論しました。
「作品鑑賞」などと言いますが、この「鑑賞」の中身―その作業過程（プロセス）を少し分析してみると、三つの層から出来ていることが解ります。まず、
①作品に向い合い、その作品世界に浸る喜び。これが感興・喜びのいちばん外側を包んでいます。
②そうして作品を眺めていますと、知らず知らずのうちに、いろんな発見をします。意図的に疑問を見つけて行く人もいます。美術館の鑑賞ガイドなんかその方法を使いますね「そこに描かれている白い塊はなぜ白なのでしょうか」とか。そういう問いかけが新しい知識を与えてくれます。二番目の感興は、作品から知識を得る喜びです。
③は、そんな作品は、どのようにして制作されたか、その制作過程を推理し制作方法を知る喜びです。これは専門的な作業に見えますが、誰でも、その専門的な領域の一部を共有出来たとき、その作品と作者の内奥に触れた、つまりと出会えた気分が得られます。専門家は専門家でその方法を示唆され自分の仕事に活かしたいと思います。
こうして〈浸る〉〈見つける〉〈知る〉の三つの感興は、そんなに分析的な過程を経なく、しかし継起的に重なり合いながら、〈作品〉と作品を観る〈私〉の関係を作り上げて行きます。
これは作品を味わう感興ですが、この感興があってこそ、作者自身も制作する喜びを持つこと

が出来るのです。

制作する場合に別の作品が大きな影響を与えている／与えてくれるというのは、この〈三つの感興〉が作者の裡に揃って、③の方法を示唆しているときです。

光琳は、『伊勢物語』と謡曲の「杜若」からこんな示唆を得てあの屏風を着想したのでしょう。

前回のＡＢＣでは、その着想振りを指摘したところで終ってしまったのですが、『伊勢物語』と『源氏物語』が光琳の中でどんな役割を演じているか、今日はもう少し二つの「物語」のその文体の特徴を、奥行きを持って眺め、その違いをはっきりさせ、これは光琳だけでなく、日本の美と知の営みのさまざまの分野で働いている「型」であることを、考えて行きたいと思います。

つまり、もっと具体的にイセ型とゲンジ型はどのように異なり、それぞれの特徴を発揮し、それぞれと関わり合っているか。それを見届けたい—そこで、まず『伊勢物語』と『源氏物語』の冒頭の文章をじっくり味わって、いろいろ考えるところから始めましょう。

その前に。もう少し、予備体操をしておきたい。それは—

この日本列島にあって営まれてきた美と知の活動の発端は、「土」を握って掌（てのひら）を開き、その土塊（つちくれ）に人形（ひとがた）を見たところ（縄文草創期の粥見井尻土偶の誕生）から観察出来ます。これはまた、〈見立て〉という方法の誕生でもあります。

この〈見立て〉という方法意識が、長いながい縄文の諸時代を潜（くぐ）りながら、弥生時代を経て古墳時代と呼ばれる時代へつながり、大陸から来た〈文字文化〉と出会い、〈無文字時代〉は終りを告げ、そこで長いあいだ溜め込んできたいろいろな経験（知）を、文字表出による情感と思考組織の奥に沈めます。発すればすぐに消え記憶という眼に視えない人の身体のどこかに蓄積させておくしかなかった言葉が（それはいつどんなふうに変質変形し、あるいは消滅するかもしれない）、文字という人の力で消すことの出来ない形をもって、永遠に遺して置くモノとなって、登場したのです。大陸では、そうやって「世界」を、自分の（人の）掌に納め／治めていることを教えられたのです。

それまでの土の塊（土偶、土器）や壁に模様を彫ったり（線紋）塗り込んだり（漆）、草や藁を編んで染めたり（衣類、籠など）、木を組んで住居や乗物（舟）を作ったり、食物の用意、煮炊き、保存をし（石器、壺、鉢）、身体を飾ったり（装身具、刺青など）していたときに遺し伝えてきた図柄、模様と決定的に異（ちが）うなにか、—「永遠」を人（じぶん）の手で形にする方法を確実なもの

にすることを、文字は可能にしたのです。図柄や模様もまた「永遠」への願い祈りを籠めて作られていたけれど、「声」がそのまま形を取る、そしてそれがナニモノデモナク、ソノモノデアル概念、思惟の形としてそこにある、そんなふうな「永遠」性はもてなかった。その技を獲得したのです。これを〈掌から手へ〉と象徴的に言うことが出来ます。〈無文字文化〉から〈文字文化〉への歴史的転換は、人の技の〈掌から手へ〉の変化です。〈産む〉から〈作る〉への転換と言い換えることも出来ます。

古倭言葉は声のみで伝え合っていました。その時期、文字として漢字を使って倭語順漢文が書かれていました。万葉仮名前身です。弥生末から古墳時代です。そういう試みを経て、万葉仮名（漢字の音を倭言葉の音と照応させた漢字を選び表記する）が考え出されます。このときすべての音を一つづつ漢字に宛てて文にすると、とてつもなく長い文章になるし、画数の多い一字一字の書記に費やす時間も語るときの声の速さと対応しない、等々の理由から例外を作った。玖沙訶という姓は日下のままにするとか、帯の字で多羅斯と訓ずるとかをした（「古事記序」太安萬侶）。この例外は、倭言葉使用者のお気に入りになったようで、万葉集ではどんどんその使用域が拡張して行き、「相見つるかも」を「相見鶴鴨」と書いたり、「懐かし」を「夏樫」と書いたりする人が出て来ます。ついには、後世「偽書」と名付けられたこんな表記もあります。万葉仮名で書きます。

若草乃新手枕乎巻始而夜哉将間二八十一不在国

（若草の新手枕をまきそめて夜をやへだてむ二八十一あらなくに）（巻十一　２５４２）

「八十一」と書いて「くく」と訓ませるのです。ほかにこの歌は、「国」なども倭音で訓ませたり、一音一字原則から離れて自在に表記していますが、「八十一」と書いて「くく＝九九」としているところ。独創的でさえあります。というより遊んでいます。万葉集でこの作者だけがこんな遊びをしているのではなく、ほかにも（次のは長歌なので、該当部冒頭だけを引用します）、

百岐年三野之国之高北之八十一隣之宮尓日向尓…

（ももきね美濃の国の高北の泳の宮に日向に…）（巻十三　３２４２）とか、

玉社者緒之絶薄八十一里喚鶏又物逢登曰又毛不相物音嬬尓有来…

（玉こそば緒の絶えぬればくくりつつまたも合ふといへまたもあはぬものは妻にありけり…）

（巻十三　３３３０）

などあり、「八十一」を「くく」と訓ませる表記法は一般化していたということです。

ほかにも、「十六」を「しし」と訓じたり（「朝猟に十六踏み起し夕猟に鳥踏み立て」（巻六　926）などもあります。もう一つ紹介したい例があります（これも長歌なので一部だけの引用にしますが、万葉集巻九に「天平元（1792）年冬十二月の歌」とあって、班田使として駆り出された下級官吏の嘆きの歌です）。

…毎見恋者雖益色二山上復有山　者　一可知美…

（見るごとに恋はまされど色に出ば人知りぬべみ）（1787）

「山上復山有」と訓じたい語順で「山」のうえに「山」ですから「出」という漢字を示しているわけです。「出」を宛てておけばいいところです。古事記（和銅五年712年）の時代に試み提起された和文表記の原則が、万葉集では（これは729年に作られていますから二十年と経っていません）こんな遊びが出来るほど漢字＝かな表記が　自在さが成熟しているのに驚きます。

この遊びが、時を超えて俳諧という世界を産んだのですが（その間数百年、俳諧の水脈は深く潜航していたのですね）、文字を誌すに当って漢字を仮名化して行く過程での「漢字」と「仮名」という言葉の表記のための二つの軸の自在な選択姿勢が、この時代の人びとの知を支えており、それが、伊勢物語型と源氏物語型（もう一つの〈二軸〉）を誘い出したと言えるでしょう。

日本の文化は、無文字文化が文字文化と出会ったとき〈二軸（二中心軸）楕円形〉の思考の基盤を作りました。ということは、〈二軸（二中心軸）楕円形〉の思考は、それ以前の列島無文字文化時代にあって、じっくりと醸成されていたということです。文字文化の時代に入っても、この〈二軸楕円形〉の思考のかたちは続いて行きます。縄文弥生文化を、この〈二軸楕円形〉思考の醸成期として見直して行く作業が残されています。もっとも、列島の歴史をこの〈二軸楕円形〉の原理で整理する作業も不可欠ですね。

『源氏物語』は意外と思われるかもしれませんが、古代中国漢文学を背景に持っています。（今日読む「桐壺」で確認出来ます）

『伊勢物語』は、古倭言葉（無文字文化）を背景にしています。古倭言葉を背景にする限り、文字を使っての叙述は極力控え／抑え、少な目です。

『源氏物語』の作者は、文字としての言葉の限界を知っていて、一つひとつ一群（ひとむれ）一群の言葉の働きを最大限に発揮させようと記述して行きます（近代へ！）（それでも、源氏物語の文体にみられる文章や言葉振りが言外に含む余韻―無文字文化の遺産―は、近代言語の持つ余韻よりはるかに多く豊かです）。

『伊勢物語』は文字としての言葉の一つひとつ、一群（ひとむれ）一群の働きは最小限にして、その文字振り素朴に誌して、そこから響き出る〈声〉と〈像〉の働きを自在にさせています。そのことが後世逆に働き、「男」を史上の実在の人物（業平）に仮定する解釈を蔓延させることにもなりました。

こんなことを前もって心得ておいていただくと、二つの物語の原文を楽しく読めるのではないか、と誌してみました。